

べっふの文化財

No.47
平成29年3月

—別府の仏教美術①—



別府市指定有形文化財「絹本着色雪村友梅像」

別府市教育委員会
別府市文化財保護審議会

目 次

1	はじめに	1
2	別府の仏像（渡辺文雄）	2
3	別府の仏教絵画（高宮なつ美）	8
4	資料一覧（渡辺文雄・高宮なつ美）	14
5	おわりに	21

執筆担当者

渡辺 文雄（別府市文化財保護審議会委員 大分県文化財保護審議会委員）
高宮なつ美（別府市文化財保護審議会委員 大分県立歴史博物館学芸員）

凡 例

- 1 記載寺院の順序は、原則として調査を行った順番に則っている。
- 2 資料一覧には、文化財の名称、員数、品質、法量、制作年代、落款、印章、備考の項を設けた。
- 3 資料一覧中の表記については、以下のように定めた。
 - ① 制作年代について、明らかな場合はそれを記し、その他資料の情報から推定できる場合については、その時代名を記した。
 - ② 法量について、単位はセンチメートルとした。
- 4 資料の裏書等の翻刻における表記は、次のとおりである。
 - ① 用字について、旧漢字・異体字等はそのままとした。
 - ② 改行は、／で示した。
 - ③ 判読が難しい文字は、字数に応じて□で示した。

1 はじめに

大分県は、宇佐・国東半島を中心に古くから仏教文化が栄え、様々な文化財が今日までのこされてきました。ここ別府市にも、多くの仏像や仏画、あるいは石塔などが伝えられ、豊かな歴史と文化が育まれてきたことがうかがえます。

別府市では平成 26 年度から市内各地の寺院を中心に、文化財の所在確認と基礎調査を実施しています。これまで松音寺（赤松）・宝満寺（田の口）・曹源寺（中須賀元町）・長泉寺（野田）・永福寺（風呂本）・西念寺（内竈）・浜脇薬師堂（浜脇）の調査を行いました。平安時代に遡る仏像や、近世・近代に描かれた仏画、開山や中興にまつわる石塔など、多様な仏教文化の遺産がのこされていることが改めて確認されました。その中でも、松音寺に伝来した「絹本着色 雪村友梅像」は、像主であり松音寺の開山・雪村友梅の没後間もなく描かれた南北朝時代の作であることが明らかとなりました。県内でも数少ない中世肖像画のひとつとして貴重な作例であり、平成 28 年 8 月 10 日に別府市有形文化財に指定されました。

本書は、別府市における仏教文化財調査の成果紹介の一環として刊行いたします。本調査をひとつの契機とし、今後の文化財保護に向けての一助となりましたら幸いです。

2 別府の仏像

県中央部、西の伽藍岳・扇山・鶴見岳を背に別府湾に臨む別府市の市域は、古くは速見郡に属し、速見郡五郷の一つ朝見郷がこれにあたる。平安後期には、同郷内に宇佐宮弥勒寺^{かまどのしやう}領竈門荘および宇佐宮領石垣荘が成立、弘安8年（1285）の『豊後国凶田帳』には「竈門荘 80 町 弥勒寺領、石垣荘 200 町 宇佐宮領、朝見郷 80 町 宇佐宮領」とある。

これら3つの領域は、竈門荘が現市域の北部を西から東に流れる^{ひやかわ}冷川・^{うちかまど}新川の流域（内竈・野田・亀川など）、石垣荘が市域中央部の平田川・春木川流域（上人・中須賀・石垣東西・鉄輪・実相寺・鶴見・荘園など）、朝見郷が文字通り境川を境として市域の南部（現市街中心部から浜脇・朝見・田の口など）に位置する。各領域には、鎮守として八幡宮の分霊^{かんじやう}が^{かんじやう}勧請され、竈門荘には八幡竈門神社が内竈地区に、石垣荘には八幡石垣神社が中須賀地区に、朝見郷には八幡朝見神社が朝見地区に鎮座し、それぞれ神宮寺^{こうし}が創建された。当地における仏教は、これら神宮寺^{こうし}を嚆矢として先ず天台宗が浸透し、守護大友氏が進出した中世には、臨済・曹洞の禅宗（後には^{おうぼくしやう}黄檗宗も）、天台浄土教から派生した浄土系諸宗（浄土宗・浄土真宗・時宗など）がその裾野を広げながら展開していった。

これら諸寺院に安置された仏像は、戦乱等による回禄で寺院とともに失われたものも多いが、幸いにして現在に伝えられたものの中には、平安時代に遡るものが散見され、別府市域の歴史の古さと人びとの信仰の厚さを物語っている。以下、別府市内に所在する多くの仏像のうち、今回の調査で知見し実査し得たものについて、調査の順を追って管見をそえて紹介したい。

（1）松音寺の十一面観音菩薩像

市内赤松地区にある^{しやうおんじ}松音寺の本尊十一面観音菩薩坐像（写真1）は、像高 35.2cmの小像であるが、その像底に以下のような墨書銘（写真2）があることで注目される。

（像底墨書銘）于時□□九季 甲□／五月吉祥日 敬白／奉造立十一面観音／右意趣者为現世安穩／後生善處也／當寺／赤松 衿園寺

「□□九季」で干支が「甲□」なのは、正平9年しかなく、本像が正平9年（1354）5月に赤松の^{しやうおん}松園（音）寺のために造立されたことが知られる。明治21年の『松音寺由来記』によれば、本像は、播磨守護赤松家の但馬入道真隆なるものが家臣宇野新藤五郎とともに当地に携え来たもので、後大友氏に仕え、本像を本尊として建久7年（1196）一字を建立したものであるが、少なくとも年代的には矛盾する。

このことは、本像の作ぶりからも窺えることであって、その^{うちぐ}内削りなしの一木造という古式の構造にもかかわらず、頭髮の波打つ毛筋や、厚い^{うわまぶた}上瞼に抑揚のある切れ長の眼による^{つや}艶めいた表情、癖のある衣文表現などに、鎌倉彫刻の理想主義が新来



1. 松音寺・十一面観音菩薩坐像

の宋風彫刻の影響を受けながら形骸化していく時期、14世紀半ばから後半にかけての頃の特徴を示している。

寺伝によると、松音寺は名僧雪村友梅（1290～1346）を開山とするが、この点は同寺の位牌に「勅謚宝覺真空雪村友梅せつそんゆうばい禪師大和尚」とあるほか、「雪村友梅像」の頂相ちんそう（後掲）が所蔵され、また同寺裏山の歴代墓地にある宝塔（P.20 写真 21）に「開山塔／貞和二（1346）丙戌／十二月日」とあり信憑性が高い。



2. 同像底墨書銘

ただ、雪村は建武元年（1334）に大友氏に招かれ、同氏の菩提寺である府内万寿寺の住持を務め、ほどなく京都に戻り貞和2年に示寂していることから、これはあくまで勧請開山の可能性が高い。この宝塔自体、その形式からは戦国時代、16世紀頃の造立とみられる。当時赤松の地は、別府から浜脇を通り、当地からぜにがめとうげ銭瓶峠を越えて府中へ入るという交通路の要衝であった。おそらく、雪村が豊後を去って後ほどなく、当地の豪族ないし大友氏そのものによって同寺が創建されたものであろう。

（2）宝満寺の十一面千手観音像と如意輪観音像

田の口にある宝籠山宝満寺には、本尊十一面千手観音菩薩像とは別に、木造如意輪観音菩薩坐像いかるがが所在する。このうち、『宝満寺由来記』（明治38年）が、聖徳太子自刻の作で斑鳩宮に安置されていたものを、皇極天皇2年（643）蘇我入鹿が山背大兄王を討った時、丹波五郎なるものが尊像を奉じて豊後国朝見郷に隠棲したと伝える本尊については、秘仏のため誠に残念だが調査できなかった。以下では、寺伝でこの丹波五郎の守護仏と伝える如意輪観音坐像（写真3）について紹介しておく。

像高24.9cmの小像のわりに細かな木組みをみせ、頭軀共木の一材に両側面材と膝部および六臂ろっぴを矧ぎ寄せ、裾先もどりと髻にも別材を接合する。さらに面相部を割矧いで目に玉眼を嵌める。頭上の宝冠は銅板の透かし彫りで、随所に玉の付いたようらく璽珞を垂らす。卵型の面部に刻む小ぶりの目鼻立ちは、しょうしや瀟洒で涼やかな表情を表し、抑揚を抑えた体部の肉取りや細身の六臂などとともに、工芸的な形式美をみせている。このような作域から、本像の制作年代は、安土桃山時代から江戸時代もわりと早い時期に求められよう。



3. 宝満寺・如意輪観音坐像

上記『由来記』によれば、その後養老2年（718）、にんもんぼさつ仁聞菩薩による宝満寺開基と豊後守護大友氏による寺領寄進と伽藍整備が伝えられる。八幡神の応化身とされる仁聞による開基伝承については、朝見郷が宇佐宮領であったことと関わるものと考えられ、また大友氏との関係については、貞治3年（1364）2月の『大友氏時所領所職等注進状案』（大友文書）ほかで、「朝見郷宝満寺」が大友惣領家の所領に組み入れられていることと関わっているよう。

(3) 曹源寺の仏像

中須賀元町にある曹源寺（臨濟宗）は、同寺縁起によれば初めは「道泉寺」と称し、天永元年（978）八幡石垣寺第2世一念大法師を開祖とする天台宗寺院であったという。天永元年という年代はともかく、ここにある八幡石垣寺というのは、おそらく石垣荘の鎮守石垣八幡宮の神宮寺のことであろう。その後数百年、寺勢衰えていたのを慶安元年（1648）大友家臣吉富嘉兵衛尉藤原道忠なる人物の寄進により現在地に移転、伽藍を整備し、府内万寿寺の第3世乾叟^{けんそう}禪師を請じて中興開山となし、臨濟宗寺院として再興したと伝える。

曹源寺に伝わる仏像としては、現本尊である①木造釈迦三尊像のほか、上記道泉寺の本尊であったと伝える②木造薬師三尊像、近隣に所在した円通寺（実は石垣八幡神宮寺である石垣寺の後身）伝来とされる③銅造如意輪観音坐像、および曹源寺本堂前庭に安置される④鉄造釈迦如来坐像がある。このうち、①②については、はめ殺しのガラス枠に覆われ詳細な調査が不能で、遠見からの目視のみでの報告を許されたい。

① 本尊釈迦如来坐像、文殊・普賢菩薩坐像

慶安元年（1648）再興時の本尊である。近年の厚彩色のため本来の作域を窺えないが、中尊の大きめの頭部に肩幅狭く膝高の体勢や、通肩の大衣に下半身に着けた裾が腹前を蔽う独特な服制など、江戸初期にもたらされたいわゆる黄檗^{おうぼく}様と呼ばれる新様式の像容を示している。

② 木造薬師如来坐像（写真4）、日光・月光菩薩立像

当寺の前身である道泉寺の旧本尊薬師三尊像である。これも近年の厚彩色で本来の作ぶりが損なわれているが、三尊に共通した両頬に膨らみをもたせた穏やかな円満相や、浅彫りの簡略な衣文表現、中尊薬師の小粒^{らぼつ}の螺髪を切り揃えた形の良い肉髻や両胸・腹部の膨らみを明瞭に表した厚みのある体貌、広大な膝張など、平安後期・12世紀代の和様彫刻の特徴を見せている。



4. 曹源寺・薬師如来坐像

③ 銅造如意輪観音坐像（P.20 写真24）

石垣荘の鎮守石垣八幡宮の神宮寺の後身であった円通寺の旧本尊と伝える。本像とともに伝えられた『秘仏観世音菩薩縁起』

（中身には『大慈山八幡円通寺縁起』とある）によれば、天台僧浄蔵^{じょうぞう}（891～964）が三国伝来の如意輪観音像を携えて当地を来訪、承平5年（935）石垣八幡宮神宮寺（石垣寺）を建立し観音像を本尊として安置、後延慶元年（1308）守護大友貞親^{おおともさだちか}が衰微した神宮寺を再興、円通寺と改称し、観音像を本尊としたという。ただし、現在の銅造如意輪観音像は、当初像が失われたのであろうか、明らかに近代になってからの作である。像高20.8cm。

④ 鉄造釈迦如来坐像（写真5）

曹源寺の前庭東側に設えた石造の基壇・基礎・請花座^{うけばなざ}の上に安置される。像高105.5cmの鉄製鑄造仏である。基礎側面に、「法華経化城喩品^{ほけきょうけじょうゆひん}」の偈とともに、造立銘が陰刻される。それによれば、

本像は寛政12年(1800)8月に当寺住職舜叟しゆんそうの代に造立されたもので、作者は府内駄原だのはるいもじ鑄物師植木平右衛門いしく・石工高橋安右衛門であった。ちなみに、当地の庄屋「吉富嘉兵衛藤原道□」の名がみえるが、これは当寺縁起にいう慶安元年(1648)当寺再興時の寄進者「大友家臣吉富嘉兵衛」と同名である。



5. 曹源寺・鉄造釈迦如来坐像

(4) 長泉寺の薬師如来像ほか

市内野田に所在する長泉寺(浄土宗)は、古くは天台宗で、当時の本尊だった薬師如来坐像をそのまま本尊とする。『長泉寺略縁起』によれば、当寺は寛徳元年(1044)、後朱雀天皇ごすざく(在位1036~45)の皇太子親仁親王ちかひと(後の後冷泉天皇ごれいぜい)が重病になり、夢中に現れた薬師如来のお告げで豊後国竈門荘の霊泉に入浴、その病が癒えたことにより同地に一字を建立し、薬師如来像を安置したことに始まるという。

薬師如来坐像(写真6)は、像高59.2cm、木組みはきわめて古式で、両肩を含めて頭・体共木の一木造からなり内刳りもない。朽損のため目鼻立ちは不明瞭だが、胸腹部の膨らみは明瞭で、両肩から腹前に流れる衣文は一部に鑄立しのぎちがみられるなど、古様な形式美を示す。一木造の古式な構造と併せ判断すると、その造立年代は同寺が創建されたという平安後期の11世紀まで遡ろう。ただし、衣文表現に平明で整った彫技を見せる両膝部は、平安末期から鎌倉期にかけての後補であろう。



6. 長泉寺・薬師如来坐像

なお、長泉寺が天正年間(1573~92)の兵火による回祿以後、いつ頃浄土宗になったか定かではないが、転宗以後の長泉寺に関わるものに、木造善導大師・円光大師(法然)坐像がある。両者ともに檜材寄木造からなる像高40cmほどの彩色玉眼像であるが、近年の修理に際して胎内銘が発見されており、前者が寛政元年(1786)、「法橋雲道門人 豊府生矢野氏」、後者が宝永6年(1709)、「大仏師くないほつきょう宮内法橋」の作になることが知られる。このうち宮内法橋は、江戸初期頃から三代にわたって同名の「宮内法橋宗慶そうけい」を名のって西国一円に作品を遺す大坂仏師で、年代からして翌宝永7年(1710)、兵庫県洲本市・平木庵観音堂の薬師如来像を作った二代宮内法橋であろう。

(5) 永福寺の恵信尼像ほか

鉄輪風呂本にある温泉山永福寺(時宗)は古くは松寿寺しょうじゆじと称し、明治初年の『温泉山松寿庵由緒書』によれば、時宗の開祖一遍が豊後來訪の折、鉄輪の地で老翁に会いその示唆により湯治場を開いた。そこへ守護大友頼泰が一字を建て寺号を請うた。一遍は自らの幼名松寿丸にちなんで温泉山松寿寺と名付けたという。江戸時代の松寿寺は久しく無檀・無住であったが、宝暦8年(1758)藤沢・

清浄光寺から淳盈が入寺するに及んで、清浄光寺末の時宗寺院として再興されたという。ちなみに、当寺には宝暦6年（1756）、淳盈による朱書裏書のある通称「楠の名号」と呼ばれる墨書六字名号板（P.20 写真 25）がある。その後、明治期になって再び無住の時期があったが、同18年（1885）檀信徒らの願い出により、同24年広島県尾道の永福寺の廃跡を継いで寺号を改称したという。

永福寺所在の彫刻作品としては、その作ぶりから宝暦8年の再興時に安置されたとみられる本尊阿弥陀如来立像（P.20 写真 28：檜材寄木造、漆箔、玉眼、像高65cm）のほか、以前は同寺の「湯浴み祭」にも使われた一遍上人坐像（木造、彩色、玉眼、像高61.3cm）、さらには大正5年（1916）茨城県稲田の西念寺から譲り受けた木造恵信尼坐像の古像があり注目される。

恵信尼坐像（写真7）について。檜材を用いた頭・体共木で彫眼の一木造からなり内割りもない。以上の軀幹材に両肩から腕にかけての側面材および両袂をたもと短ぎ付け、これに裾先・袖口を含めた膝部横一材を接合し、両手首を袖口に挿し込む。彩色の痕跡がなく、当初から素地仕上げであったとみられる。頭巾を被り両手で数珠を執って静かに端座する思慮深い老女の姿が的確に表現されている。コンパクトな人物像の形態感や衣文表現の特徴などから、室町時代も15世紀代の製作とみられる。大正5年の譲証文があり、上記のようにもとは茨城県稲田（親鸞が越後配流の後、妻恵信尼とともに一時滞在した地）の西念寺に所在したもので、伝来の確かさを物語っている。



7. 永福寺・恵信尼坐像

（6）西念寺の阿弥陀如来像ほか

市内内竈地区にある西念寺（浄土真宗本願寺派）は、同寺の『由緒書』によれば、高階泰智なるものが古市（現古市町）に小庵を結び、文亀元年（1501）上洛し宗門（浄土真宗）に帰依、本願寺実如上人から法名正念を賜り、開基仏（方便法身像）を下付されたことに始まるという。第3代正現の時、寛永元年（1624）本願寺准如上人より木仏（木造阿弥陀仏）の御免があり、また同5年（1628）には寺号公称が許されている。

西念寺には、上記寛永元年に安置の許しがあった木仏に該当するとみられる現本尊阿弥陀如来立像のほか、いずれも平安仏とみられる大小2軀の阿弥陀如来坐像①②、およびこれも平安仏と見られる③観音菩薩立像がある。このうち、大きい阿弥陀如来像と観音菩薩像は、明治4年（1871）の神仏分離令発効時に八幡竈門神社の神宮寺であった長福寺（阿弥陀堂）から移されてきたものという。

① 木造阿弥陀如来坐像（写真8）像高87.2cm

後世の厚彩色のため木組みの構造等不明瞭だが、基本的には頭・体共木の内割りのない一木造で、膝前部横一材を短ぎ付け



8. 西念寺・阿弥陀如来坐像

る。後補の玉眼を嵌めた面部の一部、両耳・左肘先・両手首先など後補材が多いが、形良く盛り上がった肉髻や抑揚の利いた胸腹部の肉取り、両肩・腕から腹部を蔽う着衣の浅く整理された衣文などの特徴から、平安後期は12世紀も早い頃の造立であろう。

② 木造阿弥陀如来坐像 (P.20 写真 29) 像高 39.8cm

これも頭・体共木の一木造で内削りもない。各部のバランスを欠くなかで、大きめの螺髪を刻みつけた形の良い肉髻や膨らみを表した胸腹部の肉付け、平明な衣文などに、12世紀末頃の特徴を示す。これも膝部をはじめ左耳・右肘先・左手首先など後補材が多いのが惜まれる。

③ 木造観音菩薩立像 (P.20 写真 30) 像高 89.5cm

手に未開敷蓮華(後補)を持つことから観音菩薩とわかり、その法量から①の阿弥陀如来像の脇侍菩薩とも考えられる。短軀で下半身に重心のある体勢や条帛・裳にみる平明な衣文表現など、これも12世紀代の造立になるものであろう。面部および頭頂部後方・右耳・右肘先・両足先など後補の部分が多い。

(7) 浜脇薬師堂の本尊薬師如来像

浜脇温泉は、古くは「吐呂の湯」と呼ばれ、別府八湯のなかでは最も起源が古いといわれる。伝承では、聖徳太子の父用明天皇が病氣平癒のために当地に行幸し、入湯したと伝えられる。明治期の『速見郡村誌』によれば、浜脇には東湯・西湯・泥湯があった。ほかに薬師温泉があり、古くから浜脇・田野口の両村がまつる湯薬師仏が薬師堂に安置されていた。この薬師仏は豊国法師の作と伝え、薬師温泉の守護仏とされた。以前は、毎年8月下旬に行われる浜脇温泉薬師祭に際して、薬師仏供養を行う浜脇・崇福寺によって出開帳が行われた。

薬師堂本尊薬師如来坐像(写真9)は、像高16.3cmの小像であるが、そのわりに小ささを感じさせない堂々とした量感が表されている。両胸と腹部のくびれを明瞭に表し、厚みのある体貌、張りのある両膝、そして何よりも両肩から腹前・両膝に流れる鋭い衣文表現など、9～10世紀頃の平安前期彫刻の名残を見せている。虫喰い、朽損が著しいのが惜まれる。



9. 浜脇薬師堂・薬師如来坐像

以上、これまで調査の終了した7カ寺、17件の仏像(肖像を含む)について、私見をまじえて概要を紹介してきたが、これらは別府市内に数多く所在する仏像群のごく一部に過ぎず、調査は今後も継続して行う予定である。

3 別府の仏教絵画

(1) 松音寺

雪村友梅像 1幅

品質：絹本着色

法量：本来 縦 111.8 横 51.5

現状 縦 109.9 横 51.2

制作年代：南北朝時代（14世紀後期）

^{しょうおんじ}松音寺の開山とされる^{せつそんゆうばい}雪村友梅（1290～1346）の姿を描いたもの。友梅は越後国で生まれ、幼少時に鎌倉建仁寺の^{いつざんいちねい}一山一寧に仕えた。後に京都の建仁寺に入り、徳治2年（1307）に入元。元徳元年（1329）帰国。建武元年（1334）に豊後守護大友氏に招かれ、同氏の菩提寺である府内万寿寺の住持を務めた。

顔や手などの肉身は細く柔らかな朱線で描かれ、僧衣・^{きよくろく}曲袂などは硬く均質な太さの墨線で描き出される。温和な表情を浮かべ、朱でうっすらと表された^{まぶた}二重瞼の線や、所々に白い毛が混じる眉毛など、像主の特徴をよく捉えている点や、線描の巧みな使い分け、曲袂などに施された細やかな工芸技法の描写など、鎌倉・南北朝時代14世紀の肖像画に通

じる点が多く確認出来る。本図は友梅没後間もない頃に描かれたものと考えられ、南北朝時代14世紀後期頃の制作といえよう。県内でも数少ない中世に遡る肖像画のひとつである。



10. 松音寺・雪村友梅像

仏涅槃図 1幅

品質：紙本着色

法量：本紙 縦 124.0 横 83.8

制作年代：江戸時代後期（19世紀）

釈迦如来が右手を枕に横たわる、第二形式の基本的な涅槃図である。柔らかく抑揚のはっきりとした描線、鮮やかな色彩、金箔や金泥による装飾、薄桃色や白緑色の中間色で表された^{ひょうん}飛雲など、江戸時代の仏画に顕著な特徴が見い出される。また、釈迦や会衆の表情はやや硬く固まっており、動物たちの中には形態が不自然で、種類も判然としないものが描かれ、写し崩れが顕著である。これらの特徴から、本図の制作は江戸時代後半と考えられる。

(2) 曹源寺

三国伝来観世音八幡大神影嚮図 2幅

品質：紙本着色

法量：第1幅本紙 縦 123.3 横 61.8

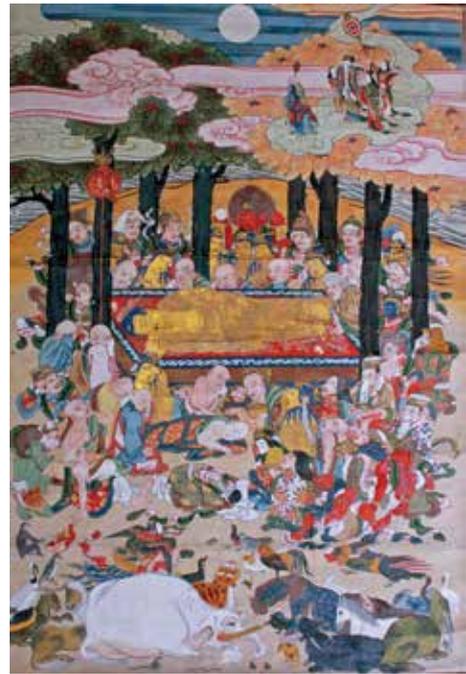
第2幅本紙 縦 123.8 横 61.5

制作年代：江戸時代中期（18世紀）

曹源寺には、もと円通寺の本尊であった如意輪観音像が安置される。本図は円通寺および円通寺の鎮守である八幡石垣神社の縁起を2幅にかけて描いたものである。第1幅には、円通寺の開山である浄蔵じょうぞうが諸国行脚の途上で宇佐大神の化身である貴婦人に出会い、浄蔵に一字を建立すべき土地を示した場面。土地の人々に慕われた浄蔵が、当地の人々を悩ませていた焰渦巻く地獄原を鎮める場面を描く。第2幅には、第1幅から続き、やはり土地の人々を悩ませていた悪風を巻き起こす海中の龍を、法華経の功德により鎮める場面。承平5年（985）9月8日、念持仏であった如意輪観音を祀る石垣寺を落成し、鎮守として石垣八幡宮を建立した場面。延慶元年（1308）に大友貞親おともさだちかが書写山貫主、堯勇ぎょうゆうを招き「大慈山八幡圓通寺仁王院」として再興する場面が描かれる。

なお、本図は裏書きから天保6年（1835）および安政5年（1858）に修復を施したこと。安政の修理後から経年により破損が進んだため、観音信仰者の寄進により、後世に長く伝えるべく昭和41年（1966）に修理を行ったことが分かる。天保6年に修復が行われているため、制作年代はそれ以前まで遡ると考えられる。

画面全体を白線で縁取った濃藍色のすやり霞で区切り、さらに各場面を金箔の雲形で装飾する。細く柔らかな描線で描かれた人物たちは、着衣の文様や姿態などに硬さが見られるものの、一人一人表情が丁寧に描き分けられ、頭髪など丹念な描写である。自然景に目を向けると、山並や土坡は薄茶や緑色を塗り重ねて表され、松の樹には一部輪郭線を引かずに、色の微妙な濃淡で立体感を出している。全体的に穏やかな大和絵の描法で、色彩も淡く柔和である。すやり霞の描法は、18世紀前半頃の親鸞聖人絵伝に顕著に見い出されるもので、本図の制作年代も江戸時代中期頃まで遡る可能性が高い。



11. 松音寺・仏涅槃図



12.曹源寺・三国伝来観世音像八幡大神影嚮図 第1幅



13.三国伝来観世音像八幡大神影嚮図 第2幅

(3) 長泉寺

長泉寺乳薬師縁起曼荼羅図 1幅

品質：絹本着色

法量：本紙 縦 139.0 横 117.9

筆者：光治

制作年代：昭和 14 年（1939）

長泉寺および本尊薬師如来にまつわる縁起を描いたもの。長泉寺の薬師如来像は、八幡神の化身とされる仁聞菩薩にんもんぼさつの作といわれ、特に乳の出ない女性に対する靈験から乳薬師ちちやくしとして信仰された。

本図は中央に大きく本尊薬師如来の姿を描き、その周囲に「朱湯山寛徳院長泉寺略縁起」に説かれる長泉寺および薬師如来像の縁起を描く。中央上部には、仁聞菩薩が薬師如来像を刻み出した場面を描き、上部から向かって右半分にかけて病に倒れた皇太子親仁親王ちかひと（後冷泉天皇ごれいぜい）が薬師如来のお告げに従い、豊後国竈門荘かまどのしょうにある靈泉に入浴したところ病が平癒したため、この地に薬師如来を祀る堂宇を建立したという長泉寺の建立縁起が描かれる。また、左半分には、天正年間（1573～91）の大友氏による焼き打ちにより堂宇は灰燼かいじんに帰したものの、奇跡的に戦火を免れて草庵に祀られるようになった薬師如来像と、貞享年間（1684～87）の白勇による再興が表される。

なお、画面下段には朱塗りの柱や扉を持つ堂宇と、飛雲^{ひうん}に坐す薬師如来、堂宇からの参拝帰りらしき赤子を抱いた老人の姿が描かれる。このような場面は縁起中には見いだされないが、薬師如来の靈験を改めて示す場面として描かれたものと推測される。

中央の薬師如来は、やや小ぶりの肉髻^{にっけい}に細かく網目状に刻まれた螺髪^{らぼう}、右肩が上がり、左肩がやや下がる造形など、本尊薬師如来坐像の特徴をよく捉えている。樹木や家屋の屋根にはたらし込み技法を用いる。人物たちはやや類型的な表現がなされるものの、表情や仕草、着衣など丹念に描き込む。裏書きから、昭和14年(1939)、長泉寺12世覺譽静達^{かくよ}の代に奉納されたものであることが分かる。



14. 長泉寺・長泉寺乳薬師縁起曼荼羅図

裏書きから、昭和14年(1939)、長泉寺12世覺譽静達^{かくよ}の代に奉納されたものであることが分かる。

(4) 永福寺

遊行上人縁起絵 1巻

品質：紙本着色

法量：本紙 縦32.2 横1500.6 / 断簡 縦31.6 横77.2

制作年代：南北朝時代(14世紀)

時宗の開祖、一遍^{いっぺん}の事跡を描いたものは「一遍聖絵^{いっぺんひじりえ}」と呼ばれる。一遍聖絵には、一遍の異母弟・聖戒^{しょうかい}が一遍の生涯と諸国遊行をまとめた全12巻からなる「一遍上人絵伝」と、時宗第2祖・他阿真教^{たあしんきょう}の弟子である宗俊^{そうしゅん}がまとめた、一遍と他阿の2代にわたる教化の過程を全10巻にまとめた「遊行上人縁起絵」(宗俊本)の系統がある。永福寺に伝来する本絵巻は、宗俊本系統に属するものである。宗俊本は、前半4巻に一遍の伝記を、後半6巻に他阿の伝記を描く。永福寺には他阿の事跡を描いた第7巻のみが伝存し、第1段冒頭の詞書を3行分欠く他は、第6段までの詞・絵とも全て揃う。

所々に顔料の剥落が認められるものの、全体的に淡い彩色で着衣の文様等も丁寧に表現される。人物はやや定型化された表現が見られるものの、その表情には個性が的確に捉えられる。着衣の描線は柔らかく、その優れた質感表現から画家の技量を伺うことが出来、南北朝時代の制作とみなされる。



15. 永福寺・遊行上人縁起絵

(5) 西念寺

親鸞聖人絵伝 4幅

品質：絹本着色

法量：本紙各 縦 143.7 横 77.2

制作年代：宝永7年（1710）

浄土真宗の祖、親鸞しんらんの一生を描いたもので、親鸞の出家から入滅までと入滅後10年経った後に親鸞の肖像を安置した大谷廟堂が建立されるまでが描かれる。親鸞聖人絵伝は本山直轄の絵所えどころで描かれ、裏面に当時の門主の花押かおうを添えて全国の寺院に下付されるのが一般的であった。本図にも裏書きがのこり、宝永7年（1710）6月3日、松翁を願主とし、浄土真宗本願寺派14世・寂如じよくによの代に下付されたものであることが分かる。

本図に見られる白線で縁取られた濃藍色のすやり霞は、1700年代前半の親鸞聖人絵伝に顕著な特徴である。また、画中に描かれた朝顔や撫子などの草花、松や桜などの樹木は

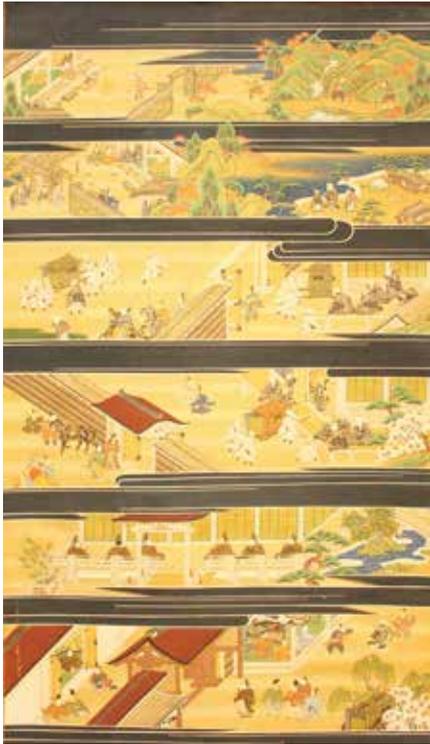
それぞれ丹念に描き込まれる。水面には白線で細やかな波紋が描かれ、輿や牛車、着衣などの文様表現も緻密である。龍や山水が描かれた画中画も丁寧に描き込まれ、細部の装飾表現が見事である。



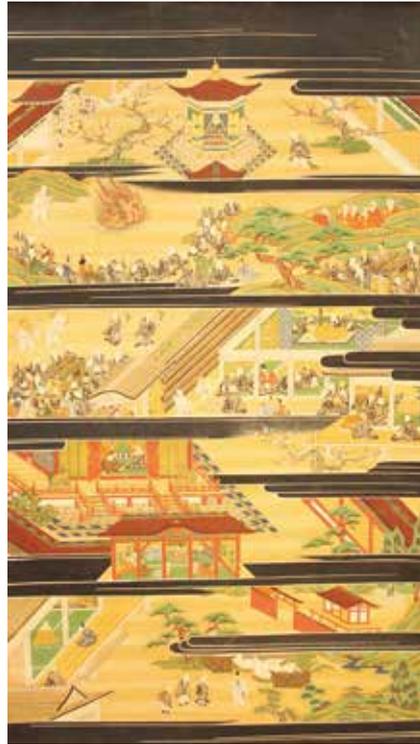
16. 西念寺・親鸞聖人絵伝 第1幅



17. 親鸞聖人絵伝 第2幅



18. 親鸞聖人絵伝 第3幅



19. 親鸞聖人絵伝 第4幅

方便法身像 1幅

品質：絹本着色

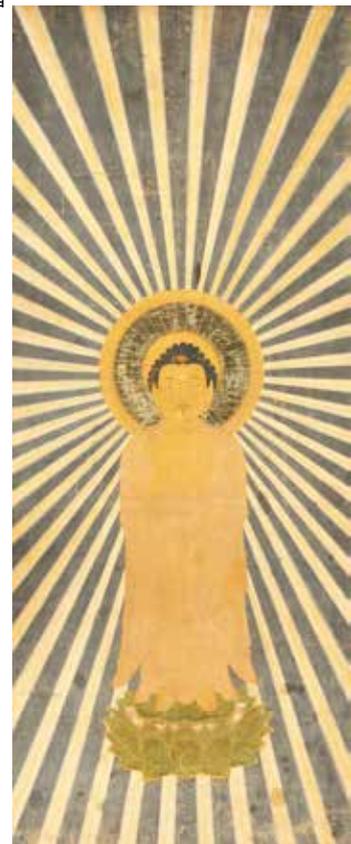
法量：本紙 縦 92.6 横 37.9

制作年代：江戸時代中期（18世紀）

金色に輝く阿弥陀如来の姿を真正面から描いたもので、浄土真宗寺院独特の仏画である。阿弥陀如来は蓮華座の上に直立し、虚空に浮かび上がるかのような姿である。阿弥陀如来はその頭光から48条の光明を放つ。これは、阿弥陀如来の四十八誓願に由来するものである。方便法身像は、本願寺第8世・蓮如れんによの代より末寺に多く下付されるようになったものである。図様の成立には、正面向きの阿弥陀来迎図や、光明を放つ十字名号など、先行する様々な仏画からの影響が考えられる。

本図には裏書きは残されていないものの、大粒の螺髪らほつ、三角状に盛り上がる肉髻につけい、白色地に金泥や截金きりかねで文様を表した着衣などの特徴から、江戸時代中期以降の制作とみなされる。同寺に伝来する親鸞聖人絵伝が宝永7年（1710）の作であることから、同時期に下付されたものと考えられる。

以上、これまでに調査した別府の仏画について紹介した。中世の肖像画や近世・近代の縁起絵など、多様な作例が確認された。今後も継続して調査を行う予定である。



20. 西念寺・方便法身像

4 資料一覧

(法量の単位はcm)

(1) 松音寺

所在地：大分県別府市赤松 791

宗派：臨濟宗妙心寺派

沿革：播磨守護赤松氏の但馬入道真隆が家臣宇野新藤五郎をともなって当地に来訪。後ち大友氏に仕え、建久7年(1196)当寺を創建したという(『松音寺由来記』)。実際には、南北朝時代、雪村友梅(1290～1346)を勧請開山に請じて創建する。

十一面観音菩薩坐像 1 軀

品質：木造 広葉樹材(クスカ) 一木造

法量：総高(台座・光背等を含む) 70.2

[本体] 像高 35.2 髮際高 25.5 頂一顎 15.2
面幅 6.0 耳張 7.5 面奥 8.2 胸厚 7.2
腹厚 9.2 膝奥 17.0 裾出 19.7
肘張 19.2 胴幅 10.0 膝張 21.9
膝高(左) 7.2(右) 8.0 胸幅 9.6

[台座] 総高 35.0 框座：最大高 11.5
最大幅 43.0 最大奥 25.8
岩座：最大高 8.2 最大幅 39.8
最大奥 25.7 蓮華座：最大高 15.3
最大幅 31.5 最大奥 26.9

制作年代：正平9年(1354)

備考：膝部を腹部に嵌め込む。両肘・右手首先別材、頭上面別材、髻別材、鍔下地に衣は漆箔、肉身は金泥磨き付け。彫眼、白毫は水晶か。宝冠・瓔珞は銅板透彫。

台座裏墨書銘「于時□□九季 甲□／五月吉祥日 敬白／奉造立十一面観音／左意趣者為現世安穩／後生善處也／當寺／赤松 衿園寺」

雪村友梅像 1 幅

品質：絹本着色

法量：本来 縦 111.8 横 51.5

現状 縦 109.9 横 51.2

表装 縦 189.5 横 69.0

制作年代：南北朝時代(14世紀後期)

落款／印章：首□的浦／的浦(朱文円印)

付属品等：木箱

備考：右軸端欠失。本紙上部と下部で絹本切断(法量：上部縦 34.5 下部縦 75.4)、上部完全剥離。

蓋表「龍光山松音寺開山雪村友梅大和尚肖像」

蓋裏「壬子上秋 □此函新似模貞和三年友梅禪師寂ス 拝觀 首□的浦 的浦(朱文円印)」

仏涅槃図 1 幅

品質：紙本着色

法量：本紙 縦 124.0 横 83.8

表装 縦 202.8 横 106.0

制作年代：江戸時代後期(19世紀)

落款／印章：なし

付属品等：木箱

備考：両軸端欠失。裏書・箱書あり

裏書「龍光山松音禪寺什物 涅槃図 現住宗善書入」

箱蓋裏書「佛涅槃 松音寺什物」

開山宝塔 1 基

品質：溶結凝灰岩

法量：高 102.0

制作年代：室町時代後期

備考：塔身陰刻銘「開山塔／貞和二丙戌／十二月二日」

無縫塔① 1 基

品質：溶結凝灰岩

法量：高 78.0

制作年代：室町時代後期

備考：棹石銘「當寺中興實宗和尚位／弘治三□□年／十一月□日」

無縫塔② 1 基

品質：溶結凝灰岩

法量：高 102.5

制作年代：室町時代後期

備考：棹石銘「梁雲座元禪師／天正三年／二月八日」

(2) 宝満寺

所在地：大分県別府市田の口1組

宗派：天台宗

沿革：皇極天皇2年(643)、蘇我入鹿が山背大兄王を討った時、丹波五郎なる者が、斑鳩寺安置の聖徳太子自刻の十一面千手観音像を奉じて当地に穩棲。後、養老2年(718)仁聞菩薩を開基として創設。その後、守護大友氏が再興。(『宝満寺由来記』)

如意輪観音坐像 1 軀

品質：木造、一木造、ヒノキ材、玉眼、彩色

法量：[本体] 像高 24.9 髪際高 17.8

頂一顎 11.1 面幅 3.9 耳張 5.1

面奥 5.6 胸厚 6.4 腹厚 5.6

膝奥 11.6 裾出 15.1

肘張 18.2 膝張 18.8

膝高(左) 3.5(右) 11.0

足出 14.2

[台座] 総高 9.9 蓮華座：最大幅 19.6

最大奥 19.3

反花座：最大幅 20.1

最大奥 19.5

[光背] 総高 31.0 頭光(高) 18.3

(張) 14.5 支柱(高) 12.7

制作年代：安土桃山時代～江戸時代初期

備考：頭体一材に両側面材矧ぎ付け、面相部矧ぎ付け、膝横別材、裾先別材。主要2手右肘矧ぎ付け、左矧ぎ付け、左右中の2手肘から先矧ぎ付け、脇2手差し込み、肘矧ぎ付け。髻別材、玉眼嵌入、白毫水晶。宝冠銅板透彫、瓔珞に玉使用。現彩色は後補で、髻に藍色、口唇に朱、肉身・着衣に赤色顔料を塗る。台座・蓮華座・反花座・敷茄子別材。宝珠形光背は円頭光の周囲に宝雲文を浮彫し、漆地に金箔を

押す。

(3) 曹源寺

所在地：大分県別府市中須賀元町1-2

宗派：臨濟宗妙心寺派

沿革：天永元年(978)、八幡石垣寺(石垣八幡宮の神宮寺)第2世一念大法師が創立。始め道泉寺と称し、天台宗寺院であった。後、慶安元年(1648)吉富嘉兵衛藤原道忠の寄進で、府内万寿寺3世乾叟禪師を請じて中興現在にいたる。(以上『曹源寺縁起』)

薬師三尊像 3 軀

品質・構造：木造、一木造、膝別材

法量：薬師如来 像高約 75 膝張約 58

日光菩薩 像高約 65

月光菩薩 像高約 65

制作年代：平安時代後期(12世紀)

備考：十二神将像は江戸時代の後補。現彩色は昭和55年修理時のもの。曹源寺の前身である、久光山道泉寺(天台宗)の旧本尊。安置場所の関係で、正確な計測が不可能であったため、おおよその法量を掲載する。

如意輪観音坐像 1 軀

法量：像高 20.8

制作年代：近代

備考：旧円通寺本尊(天台宗・現廃寺)。三国伝来の縁起あり。

釈迦如来坐像 1 軀

品質・構造：本体は鉄製鑄造、基壇・基礎・請花座は石造

法量：像高 105.5 膝張 93.0

制作年代：寛政12年(1800)

備考：台座陰刻銘

(正面)「願以此功德／普及於一切／三界萬靈／我等與衆生／皆共成佛道」

(右側面)「于時寛政十二庚申／盆秋八月
吉祥底／現曹源比丘舜叟」

(左側面)「世話人 吉富藤左衛門 藤原道
忠／鑄師 大分郡駄原 植木平右衛門／石
工 高橋安右衛門／庄屋 吉富嘉兵衛 藤原
道□」

三国伝来観世音八幡大神影嚮図 2幅

品質：紙本着色

法量：第1幅 本紙 縦 123.3 横 61.8

表装 縦 229.8 横 75.7

第2幅 本紙 縦 123.8 横 61.5

表装 縦 231.0 横 76.4

制作年代：江戸時代中期(18世紀)

落款／印章：なし

付属品等：木箱

備考：旧円通寺(天台宗・現廃寺)什物。秘仏
観世音菩薩縁起(卷子・1巻)あり。

表装裏墨書

第1幅「往昔石垣圓通寺開祖浄蔵法師八幡大神
影嚮／来由繪傳二軸者天保六年及安政五年改／
装禎更経星霜百数十年近時破損甚遂欲／湮滅
観音信仰者献浄財加装禎以欲傳後世矣／昭和
四十一年五月吉祥日 入竺沙門敬識／願十方信
者 現當二世安樂／改装發願者 入竺沙門 矢
野嶺雄／財團法人代表 國東義隆／曹源寺住職
矢多豊水／観世音菩薩 信者諸士／観音堂管理
者 安東わかみ」

第2幅「往昔石垣圓通寺開祖浄蔵法師八幡大神
影嚮／来由繪傳二軸天保六年及安政五年改装禎
更経／星霜百数十年近時破損甚遂欲湮滅観音信
仰／者献浄財加装禎以欲傳後世矣至嘱／昭和
四十一年五月吉祥日 入竺沙門嶺敬識／願十方
信者 現當二世安樂／改装發願者 入竺沙門
矢野嶺雄／財團法人代表者 國東義隆／曹源寺
住職 矢多豊水／観世音菩薩 信者諸士／観音
堂管理者 安東わかみ」

(4) 長泉寺

所在地：大分県別府市野田4組

宗派：浄土宗

沿革：寛徳元年(1044)、親仁親王(後の後冷
泉天皇)が病氣平癒のため、薬師如来の
お告げに従って当地の霊泉に入浴。病が
癒えたことにより一字を建立したことに
始まるという。後、天正年間(1573～
92)に兵火をうけ焼失。江戸時代になっ
て再興。(『長泉寺略縁起』)

薬師如来坐像 1軀

品質：木造、一木造、針葉樹材(ヒノキか)、
内刳なし

法量：像高 59.2 髪際高 52.1 頂～顎 18.5

面長 12.3 面幅 10.7 耳張 12.1

面奥(現状・鼻先欠) 13.7

胸厚(右) 16.0 腹厚 18.5 裾出 30.9

坐奥(現状・裾先欠) 33.0 肘張 33.5

膝高(左) 9.1(右) 8.5 胸幅 20.0

制作年代：平安時代後期(11世紀)

備考：白豪後補。肉髻珠欠失。薬壺後補。膝前
別材。両肘先別材。左袖口別材で膝材に
矧ぎ付け。左手首先差し込み。右手首先
および左手首先は膝材と同時期の後補
か。右肘を竹串で接続。漆下地のみ残る。
木心は像の背面に外す。後頭部に螺髪
の刻み痕が碁盤目状に残る。

善導大師坐像 1軀

品質：木造 寄木造

法量：像高 39.8

制作年代：寛政元年(1789)

備考：胎内銘(背面)「寛政元己酉年／東都東
叡山御山王／法橋雲道門人／豊府生矢野
氏／御影堂／作」

円光大師坐像 1軀

品質：木造 寄木造

法量：像高 39.4

制作年代：宝永6年(1709)

備考：胎内銘(背面)：宝永六己丑年／十二月

吉日／圓光大師御尊像／大佛師／宮内法
橋作

長泉寺乳薬師縁起曼荼羅図 1幅

品質：絹本着色

法量：本紙 縦 139.0 横 117.9

表装 縦 223.2 横 140.5

制作年代：昭和 14 年（1939）

落款・印章：光治（朱文方印）

付属品等：木箱

備考：一枚絹

表装裏墨書「奉納者 大阪市 青山敬二氏／開
眼供養／昭和拾四年旧正月八日初縁日／長泉寺
十二世／覺譽静達代」

箱書「長泉寺乳薬師縁起曼荼羅 壹」

箱裏書「奉納 發願者 青山敬二氏 昭和拾二
年四月八日 朱湯山寛徳院長泉寺第十二世 覺
譽静達代」

(5) 永福寺

所在地：大分県別府市風呂本 1 組

宗派：時宗

沿革：初め温泉山松寿寺と称し、時宗開祖一遍
上人が豊後來訪の折、鉄輪の地で老翁に
出会いその示唆により湯治場を開き、守
護大友頼泰が一字を建立したことに始ま
るといふ（『温泉山松寿庵由緒書』）。明
治 18 年（1885）、檀信徒らの願い出が
あり、同 24 年、尾道の永福寺の廃跡を
継いで再興現在にいたる。

遊行上人縁起絵 1巻

品質：紙本着色

法量：本紙 縦 32.2 横 1500.6

断簡 縦 31.6 横 77.2

制作年代：南北朝時代（14 世紀）

落款／印章：なし

付属品等：木箱

備考：上下裁ち切り。現状 59 紙継。

紙継：① 37.8 ② 8.7 ③ 10.2 ④ 33.7

⑤ 14.5 ⑥ 37.4 ⑦ 10.7 ⑧ 28.5

⑨ 48.5 ⑩ 48.7 ⑪ 7.0 ⑫ 48.4

⑬ 18.0 ⑭ 39.7 ⑮ 30.7 ⑯ 48.6

⑰ 13.5 ⑱ 34.9 ⑲ 16.5 ⑳ 8.7

㉑ 40.0 ㉒ 11.4 ㉓ 7.5 ㉔ 48.7

㉕ 2.7 ㉖ 45.0 ㉗ 10.3 ㉘ 18.0

㉙ 36.5 ㉚ 12.3 ㉛ 28.5 ㉜ 31.8

㉝ 16.2 ㉞ 39.5 ㉟ 8.9 ㊱ 49.0

㊲ 3.4 ㊳ 43.2 ㊴ 18.5 ㊵ 29.5

㊶ 31.1 ㊷ 16.9 ㊸ 44.4 ㊹ 3.2

㊺ 19.3 ㊻ 10.4 ㊼ 36.5 ㊽ 24.6

㊾ 23.4 ㊿ 12.0 ① 26.2 ② 9.2

③ 49.0 ④ 2.4 ⑤ 45.4 ⑥ 15.1

⑦ 4.8 ⑧ 46.2 ⑨ 4.9

断簡「浄光明寺什物の寄付／遊行年百□／朱文
壺印・朱文方印」

楠の名号 1枚

品質：木製

法量：縦 91.0 横 36.5 厚 2.5

制作年代：宝暦 6 年（1756）

落款／印章：なし

付属品等：木箱

備考：裏書「維時寶暦六丙子歳八月廿三日／薩
州／諄盈欽誌」

恵信尼坐像 1軀

品質：木造 一木造 ヒノキ材

法量：像高 33.2 髪際高 29.3 頂一顎 10.5

面長 7.7 面幅 10.7

面奥（現状：鼻先欠）8.4

胸厚 10.9 腹厚 10.4 膝奥 23.0

裾出 27.3 肘張 33.5 膝張 18.8

膝高（左）7.9（右）7.0

制作年代：室町時代

備考：頭体一木。膝は横一材を矧ぎ付け。左右
の袂に三角材を嵌める。両手先袖口差し
込み。数珠は当初か。薄く漆を塗るか。
譲証文・契約書・請書・受領書あり。

譲証文：紙本墨書 2紙継 法量：19.5

横 85.1

恵信尼画像 1 幅

品質：紙本着色

法量：本紙 縦 78.5 横 34.0

制作年代：江戸時代

親鸞聖人像 1 幅

品質：紙本着色

法量：縦 29.5 横 235.6

制作年代：近代

備考：後世の模本・譲証文あり。

譲証文：紙本墨書 5紙継

紙継：① 47.0 ② 48.1 ③ 47.5 ④ 47.5

⑤ 45.5

一遍上人坐像 1 軀

品質：木造

法量：像高 61.3

制作年代：江戸時代

備考：彩色、玉眼

阿弥陀如来立像 1 軀

品質：木造 寄木造 ヒノキ材

法量：像高 65.0

制作年代：江戸時代（宝暦 8 年か）

備考：漆箔、玉眼

(6) 西念寺

所在地：大分県別府市内竈 2635

宗派：浄土真宗本願寺派

沿革：当地の豪族高階泰智が小庵を結び、文亀元年（1501）上洛し、本願寺実如上人から法名正念を賜り開基仏を下付されたことに始まる。第 3 代正現の時、寛永元年（1624）、准如上人より木仏御免、同 5 年に寺号公称。（以上『西念寺由緒書』）

阿弥陀如来坐像 1 軀

品質：木造 一木造 針葉樹材（ヒノキか）

法量：像高 87.2 髪際高 75.9 頂一顎 28.1

面長 17.4 面幅 15.5 耳張 19.2

面奥（現状・後頭部朽損）19.7

胸厚（右）19.0 腹厚 24.4 膝奥 43.8

坐奥 45.8 肘張 50.5 胸幅 28.2

膝張 64.0 膝高（左）14.3（右）13.5

制作年代：平安時代後期（12 世紀）

備考：膝および裾先に横一材を矧ぎ付け。像底内刳。体部内刳なし。右膝後方、体部との接続に三角材を嵌める。両肩口から外、左右 3.5cm ずつ矧ぎ付け。木心は中心よりやや左寄りの背面外側を通る。左手袖口別材。右下腕および両手首先別材。両手首先は一材。左手首先を袖口に差し込む。肉髻朱嵌め込み。白毫欠失。螺髪切りつけ。後頭部の螺髪は欠失。両腕後補。頭部両耳を通線で頭部前面を割放ち、目に玉眼を嵌める。両耳・玉眼後補。彩色後補。錆下地が一部残る。現状胡粉下地に彩色。面部・肉身は胡粉下地に漆を塗って金箔を貼る。着衣はベンガラの上から漆を塗る。光背・台座後補。面部は後世修理されている可能性がある。旧長福寺（竈門神社神宮寺）本尊。

阿弥陀如来坐像 1 軀

品質：木造 一木造 針葉樹材（ヒノキか）

法量：像高 39.8 髪際高 32.3 頂一顎 15.6

面長 8.9 面幅 8.6 耳張 10.1

面奥（現状・後頭部朽損）11.4

胸厚（右）9.0 腹厚 12.5 膝奥 15.2

裾出 17.7 肘張 20.6 胸幅 12.4

膝張 26.5 膝高（左）5.5（右）5.0

制作年代：平安時代後期（12 世紀末）

備考：頭体一木。膝は横一材。裾先欠失。左耳から肩にかけ、別材矧ぎ付け。右肩から先別材。右肘・手首先矧ぎ付け。左手首先矧ぎ付け。左右腰の後ろに三角材嵌め

込み。螺髪刻みつけ。後頭部は螺髪省略。
面部を割り玉眼を嵌め込もうとした痕跡
あり。肉身胡粉下地。着衣は砥の粉状の
下地痕あり。現状素地。由緒不詳。

観音菩薩立像 1 軀

品質：木造 一木造 針葉樹材（ヒノキカ）
法量：像高 89.5 髪際高 80.3 頂一顎 20.1
面長 11.2 面幅 10.6 耳張 13.7
面奥 14.4 胸厚（右）13.4 腹厚 13.2
肘張 28.2
腋下幅（現状・右腋一部欠）16.2
胴幅 13.7 裾裾張 20.3
足先開（外）15.0（内）7.5 腰幅 18.7
制作年代：平安時代後期（12 世紀）
備考：左脚をやや曲げ、腰をやや左に入れる。
左肘先後補。右肩後補材あり。右肘と手
首で矧ぐ。両足先後補。右手第 2 指欠失。
頭頂部から帽子状に後補材。右耳後補。
面部後補。玉眼を嵌めようとした痕跡あ
り。現状素地。胡粉下地後補。台座後補。
持物後補。旧長福寺（竈門神社神宮寺）蔵。
三尊像の脇侍。勢至菩薩は失われた。

親鸞聖人絵伝 4 幅

品質：絹本着色
法量：本紙各 縦 143.7 横 77.2
表装各 縦 190.9 横 80.7
制作年代：宝永 7 年（1710）
落款／印章：なし
付属品等：木箱
備考：第 1 幅「大谷本願寺親鸞聖人之縁起／釋
寂如（花押）／寶永七年庚寅六月三日／
願主釋松翁」
第 2 幅「大谷本願寺親鸞聖人之縁起／釋
寂如（花押）／寶永七年庚寅六月三日／
願主釋松翁」
第 3 幅「大谷本願寺親鸞聖人之縁起／釋
寂如（花押）／寶永七年庚寅六月三日／
興正寺門葉豊後國速見郡／古市村西念寺

什物／願主釋松翁」

第 4 幅「大谷本願寺親鸞聖人之縁起／釋
寂如（花押）／寶永七年庚寅六月三日／
願主釋松翁」

方便法身像 1 幅

品質：絹本着色
法量：本紙 縦 92.6 横 37.9
表装 縦 177.0 横 60.5
制作年代：江戸時代中期（18 世紀）
落款／印章：なし
備考：一枚絹。裏書なし。

（7）浜脇薬師堂

所在地：大分県別府市浜脇
沿革：旧浜脇・田野口両村が薬師温泉の守護仏
として祀っていた。本尊薬師如来像は、
毎年 8 月に行われる薬師祭に際して浜
脇・崇福寺によって出開帳が行われた。

薬師如来坐像 1 軀

品質：木造 一木造 針葉樹材
法量：像高 16.3 髪際高 14.5 頂一顎 5.7
面長 3.7 面幅 3.3
耳張（現状・左耳欠損）3.5
面奥（現状・鼻先欠損）4.0
胸厚（右）4.8 腹厚 5.6 膝奥（左）9.7
肘張（現状・左腕虫損）9.0 胸幅 5.7
膝張（現状・右欠損）11.8 膝高（左）2.5
（右・現状）2.6
制作年代：平安時代前期（9～10 世紀）
備考：頭頂から像底まで、両膝含め一材からな
る。内割なし。右肩・右腕肘・右手首に
矧ぎ目。右肩から右手首先まで後補。左
手首および薬壺まで同材。木芯は像底や
や腹前寄りを通る。木芯部に深さ約 1.7
cm、直径約 2.5cm の朽穴あり。彩色は、
現状煤状の黒色を呈するが、下地に漆塗
の痕跡あり。



21. 松音寺 開山宝塔



22. 松音寺 無縫塔①



23. 松音寺 無縫塔②



24. 曹源寺 如意輪観音坐像



25. 永福寺 楠の名号



26. 永福寺 恵信尼画像



27. 永福寺 親鸞聖人像



28. 永福寺 阿弥陀如来立像



29. 西念寺 阿弥陀如来坐像



30. 西念寺 観音菩薩立像

5 おわりに

今回の調査では、別府市有形文化財に指定された南北朝時代の肖像画・雪村友梅像をはじめ、数多くの文化財を確認出来ました。仏像の中でも浜脇薬師堂および長泉寺の薬師如来像、また西念寺に伝来する2躯の阿弥陀如来像と観音菩薩像は、いずれも平安時代に制作された一木造の仏像です。こうした作例は、別府の地で古くから仏教文化が栄えていたことを示すものです。

仏画に目を向けると、永福寺の遊行上人縁起は以前から知られるものではありませんが、南北朝時代の絵巻として、一遍の九州教化の歴史と合わせ重要な位置付けがなされます。曹源寺に伝わる三国伝来観世音八幡大神影嚮図および西念寺の親鸞聖人絵伝は、ともに江戸時代の縁起絵として注目され、また長泉寺の長泉寺乳薬師縁起曼荼羅図は近代の仏画として優れた作風をみせるものです。本図は近代における長泉寺の薬師信仰を知る上で、また近代仏画研究において意義深い作例です。

別府には、多くの寺社や堂宇があり、数多くの文化財が今日に伝えられています。今後も継続して調査を進め、その位置付けを明らかにすることで、文化財保護への取り組みがより充実することを願います。

最後になりましたが、本調査および本書の刊行にあたり格別のご高配を賜りました関係各位に、厚く御礼申し上げます。

参考文献

『豊後速見郡史』（志手環 大分県速見郡教育会 1925年）

『別府市の文化財』（別府市文化財調査委員会 別府市教育委員会 1983年）

『別府市誌』（別府市役所 1985年）

『べっぷの文化財 20 社寺縁起・由来記②』（小玉洋美・入江秀利・竹長賢治・安部巖・後藤武夫・藤内喜六 別府市教育委員会 1989年）

『べっぷの文化財 24 今はなき寺々』（藤内喜六・後藤武夫・入江秀利・土屋公照 別府市教育委員会 1993年）

『別府市誌3』（別府市 2003年）

『釈尊と親鸞』（龍谷ミュージアム 法蔵館 2011年）

べっふの文化財 No.47

—別府の仏教美術①—

平成 29 年 3 月

発 行	別府市教育委員会
編 集	別府市教育委員会 別府市文化財保護審議会
印 刷	大野印刷株式会社